

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008 ～ 2012

課題番号：20246093

研究課題名（和文） 日本建築様式史の再構築

研究課題名（英文） The Reconstruction of the history of Japanese Architectural Style

研究代表者

藤井 恵介 (FUJII KEISUKE)

東京大学・大学院工学系研究科・教授

研究者番号：50156816

研究成果の概要（和文）：

日本建築史の分野において、従来の建築様式史を批判的に検討し、それがもはや現在においては必ずしも有効ではないことを確認した。そして、新たな研究領域が拡大しつつあることを確認して、日本・東アジアの木造建築を対象とする、新しい建築様式史を提案する必要があることを認識した。この5年間で、新しい建築様式史を構築するための基礎的検討を行ったが、具体的な作業は、建築史の全分野、建築史以外の報告者を得て開いたシンポジウムにおける討論を通じて実施した。その記録集10冊を印刷して広く配布した。

研究成果の概要（英文）：

In the field of the history of Japanese architecture, the former history of architectural style was examined critically, and recognized not to be so effective now. We thought that expansion of new areas of investigation was progressing. So, we got the recognition that it was necessary to propose a new history of architectural style for wood structure of Japan and East Asia. Fundamental research for constructing a new history was performed within these five years. Actual works for it were done through the discussion in the symposiums, which obtained reporters of every field of architectural history, and other related histories in Japan. The 10 symposium records were printed and distributed widely.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	8,500,000	2,550,000	11,050,000
2009 年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
2010 年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2011 年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2012 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
総計	35,900,000	10,770,000	46,670,000

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：建築様式、東アジア、ヨーロッパ、住宅建築、寺院建築、禅宗様、大仏様、和様

1. 研究開始当初の背景

「日本建築史」という領域は、明治時代後期に伊東忠太と関野貞という二人によって創始され、現在まで引き継がれてきた。その間、

多くの研究が蓄積され、例えば太田博太郎『日本建築史序説』（初版は昭和22年、増補新版は昭和44年、増補第二版は平成2年）という総

合的な概説を得、さらにその後も研究の蓄積は増加し続けている。

現在の「日本建築史」という大きな枠組みは太田博太郎氏が提案したものが、ほぼそのまま引き継がれているといつてよい。しかし、その後の多くの研究の進展で、その枠組みの有効性が疑問しされる箇所も少なくない状況となっているのは確かである。現在は、研究の方法論、今までの研究成果全体の再点検を行い、新たな研究への展望を拓く段階に至ったと考えるべきである。

2. 研究の目的

本研究は、日本建築史の中で特に様式史を中心に、全分野において研究史的再点検を行うことによって、その再構築のための研究的展望を獲得することを目的としている。

第一は、建築史特有の学術用語のなかで、特に様式語を中心として研究史的な再点検を実施する。分野ごとの検討に加え、全分野での共同検討を行うことにより、建築史の全体像を展望する。

第二は、「日本建築の特質」をアジアとの比較研究によって、明らかにすることである。中国、韓国の研究者との共同研究により、その具体像を展望する。

3. 研究の方法

日本建築史学において、研究史的な検討を実施し、それを持ち寄ってシンポジウムを連続的に開催して、分野を越えた議論を重ねた。シンポジウムとその内容は以下の通りである。

(1) 平成20年12月13日、「日本住宅史と民家史を結ぶ」(担当光井渉)(於東京大学)。パネラーは川本重雄・大野敏・後藤治・光井渉及び大場修(京都府立大学教授)。現在異なる学問領域となっている住宅(貴族・武家など)と民家(町家・農家・庫裏など)を、共通の視座から検討し直すことを目的とした。このシンポジウムでは、住宅と民家を併せて論じるための可能性の所在が指摘されると同時に、問題点も改めて明確化し、今後の研究を進展させる上で重要な試みとなった。

(2) 平成22年1月23日、「日本寺院建築史と住宅建築史の接点と境界—仏堂と住宅の邂逅—」(担当溝口正人)(於東京大学)。パネラーは川本重雄・上野勝久・溝口正人、箱崎和久(奈良文化財研究所)。コメンテーターは福田美穂(京都大学人文科学研究所)。寺院建築と住宅建築の差異、同一性、その間の意匠に関わる影響関係などを検討して、中国との比較検討も行った。

(3) 平成22年3月30日、「修復・再現と

様式」(担当大橋竜太)(於東京大学)。パネラーは大橋竜太・藤川昌樹、山内美奈子(文化財保存計画協会)、青柳憲昌(東京工業大学)、上野幸夫(富山、職藝学院)、田原幸夫(JR東日本)。日本、アメリカなどの様々な修復・修理現場で、様式がどのように判断されて、再現に用いられているのか、検討した。

(4) 平成23年6月12日、『民家の移築と維持』(担当平山育男)(於東京大学)。パネラーは平山育男・中村琢巳(立命館大学)。民家の移築件数が多い理由、その維持や移築のシステムなどについて検討を行った。

(5) 平成23年10月15日、『寝殿造と書院造の間—建築史学と考古学の接点を求めて—』(担当川本重雄)(於京都女子大学)。パネラーは、川本重雄、伊藤裕偉(三重県埋蔵文化財センター)、岡陽一郎(兵庫大学兼任講師)、羽柴直人(岩手県文化振興事業団)。コメンテーター・司会を藤田盟児(広島国際大学)が務めた。中世住宅の研究上の課題と、各地で報告される中世住居の発掘事例との関係を検討した。

(6) 平成23年12月18日、『歴史的町並みの近代化と建築史研究』(担当藤川昌樹)(於東京大学)。パネラーは、梅嶋修(グリーン・シグマ)、伊藤則子(東北大学)、中野茂夫(島根大学)、三浦要一(高知女子大学)、溝口正人、藤川昌樹、後藤治。コメンテーターを土本俊和(信州大学工学部)が務めた。都市の近代化が歴史的町並みにおいて、どのように起きているのか、その実態が報告され、新たな研究上の視点が議論された。

(7) 平成23年11月27日、「江戸大名屋敷作事記録を読む」(担当藤川昌樹)(於筑波大学)。パネラーは宮崎勝美(日本史)、高屋麻理子(建築史)、加藤悠希(建築史)、渋谷葉子(日本史)、森下徹(日本史)、岩淵令治(日本史)、藤川昌樹(建築史)。山口県文書館所蔵の毛利家史料を用いた萩藩江戸屋敷の作事記録を用いた研究である。

(8) 平成23年12月10日、「中世建築における様式研究の再考」(担当上野勝久)(於東京藝術大学)。報告者は、藤井恵介(建築史)、奥健夫(美術史)、光井渉(建築史)、野村俊一(建築史)、永村眞(日本史)、上野勝久(建築史)。日本の中世における寺院建築の様式について、特に様式の折衷に焦点を当てて検討した。具体的には、精密な調査を経た鏝阿寺本堂における折衷の現象が報告された。

(9) 平成24年2月18日、「東アジアの宮殿建築と儀式—元日朝賀と宴会—」(担当川本重雄)(於東京大学)。報告者は川本重雄(日本建築史)、パン・サンハイ(ベトナム宮殿史)、福田美穂(中国宮殿史)。日中韓越四カ国の元日の宮廷行事を比較研究し、それぞれの特徴について明らかにした上で、日

本の宮殿建築の持つ特異性について検討した。

(10) 平成 24 年 11 月 17 日、「「建築様式史研究」を越えて—西欧・日本・アジア—」(担当藤井恵介)(於東京大学)。報告者、福田晴彦(九州大学名誉教授、西洋建築史)、藤井恵介(東京大学、日本建築史)。コメンテーターは大橋竜太(東京家政学院大学、イギリス建築史)、加藤耕一(東京大学、フランス建築史)、清水重敦(京都工芸繊維大学、日本建築史)、佐藤浩司(国立民族学博物館、建築人類学)。

西洋で成立、展開した「建築様式史」という概念の有効性、発展性などを再検討し、さらに日本において、同じ枠組みの「日本建築様式史」が成立しないことを明らかにし、「かたち」を主題とする研究の今後の可能性について議論した。西欧建築史では、従来の機械的な様式区分に依らない、自由かつ精度の高いかたちの分析、批評が必要であること。日本、アジアの建築史研究においては、総合的なかたちのシステムの理解が必要であること。また、その政治性まで検討する必要があること、などが提案された。また、玉井哲雄(国立歴史民俗博物館、民家史)、西田雅嗣(京都工芸繊維大学、フランス建築史)らからの積極的な提案があった。

4. 研究成果

(1) 様式史研究の再点検：本来の目的であった、様式史的研究の再点検においては、住宅史、民家史、寺院建築史、建築技術史、建築保存学分野の間において、積極的な意見交換を実施した。それぞれの分野が孤立して成立せず、相互に依存する、もしくは相互に批判的な内容をもつことも明らかになった。

(2) 研究テーマの拡大：相互批判、相互批評から、新たに発見されたテーマも多い。また研究領域が相当に拡大されていることも明らかになった。

(3) 様式研究：従来固定的にとらえられてきた「建築様式」概念を一端反故にして、新たに「かたち」の論理を構築すべきであることが明らかにされた。西欧的な理論を基礎にする従来の様式理論ではなく、日本、東アジアにおいては、木造建築の建設システムを基礎にした新たな「建築様式」概念を構築する必要が明らかにされた。

(4) 平成 20～24 年度の 5 年間に、シンポジウムを 10 回開催し、シンポジウム記録集を 10 冊刊行して、関係者に広く配布した

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 82 件)

- ① 平山育男 「大正 3(1914)年建築の橋本市木村家主屋に対する木材の供給 近代の橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材の供給 1」『日本建築学会計画系論文集』679、査読有、pp. 2165-2170、2012. 9
- ② 後藤治 「歴史的建築物に用いられている材料・構法とその評価」『建材試験情報』48号、査読無、pp. 2-7、2012. 4
- ③ 藤川昌樹 「地域の文化財建造物にゆっくりと迫る危機」『建築雑誌』1631号、査読無、pp. 14-15、2012. 4
- ④ Wataru Mitsui "Le citta storiche giapponesi. Tipologia e caratteristiche", Tipologia e caratteristiche, Quaderni d'arte e di epistemologia 2012、査読無、pp. 243-252、2012
- ⑤ 川本重雄 「古代宮殿における饗宴空間」『家具道具室内史』3号、査読有、pp. 5-20、2011
- ⑥ 溝口正人 「平安時代の建築と庭園」『平安時代庭園の研究-古代庭園研究II-』奈良文化財研究所学報第 86 冊、査読有、pp. 103-119、2011
- ⑦ 後藤治 「イギリスにおける文化財建造物の防災対策 歴史的環境を活用するためのブレイク・スルー〜イギリス編」『ビルディングレター』541号、査読無、pp. 45-51、2011
- ⑧ 上野勝久 「饗阿寺本堂の部材の年代判定について」『日本建築学会計画系論文集』678号、査読有、pp. 1939-1947、2011
- ⑨ 藤川昌樹 「町並み保存の現在・過去・未来」『日本歴史』752号、査読無、pp. 120-125、2011
- ⑩ 藤川昌樹・高屋麻里子 「萩藩江戸上屋敷式台建築の寛延度作事における建設マネジメント」『日本建築学会計画系論文集』663号、査読有、pp. 993-1101、2011
- ⑪ 角田真弓 「東京大学工学系研究科建築学専攻所蔵旧備品台帳 (2) 旧工部美術学校所蔵史料」『東京大学史紀要』29号、査読無、pp. 67-86、2011
- ⑫ 藤井恵介 「神社建築のかたち」『歴博』159号、査読無、pp. 7-10、2010
- ⑬ 川本重雄 「古代の屏風とその用法」『家具道具室内史』2号、査読有、pp. 5-16、2010
- ⑭ 平山育男 「江戸時代末期のグラバーを取扱人とする機械製材について」『日本建築学会論文報告集』652号、査読有、pp. 1599-1604、2010
- ⑮ 溝口正人 「大炊御門殿の殿舎構成とその特質-平安末期貴顕の住まいの諸相 その2-」『芸術工学への誘いXIV』、岐阜新聞社、

査読無、pp.85-99、2010

- ⑩Yuko TAAGE, Osamu GOTO, Hirokazu YAMAMOTO, Masaki TAMURA "A Study for a High Quality Preservation System of KOKERA Roofing used in Traditional Wooden Architecture PART 1 : The analysis of the life cycle performance of KOKERA roofing" WCTE2010-11th World Conference on Timber Engineering-Trentino,Italy, Poster Session, 査読有、2010
- ⑪上野勝久「古代・中世の東寺大師堂の建築について」『東京藝術大学美術学部紀要』47号、査読有、pp.23-40、2010
- ⑫藤川昌樹「土井家京都邸の構成とその変遷」『泉石』9号、査読無、pp.1-20、2010
- ⑬光井渉「組物のかたちとその社会的意味」『歴博』159号、査読無、pp.11-15、2010
- ⑭川本重雄「天皇の座～高御座・椅子・大床子・平敷～」『家具道具室内史』1号、査読有、pp.52-66、2009
- 鳥海基樹・後藤治・大橋竜太・村上正浩・関澤愛「フランスに於ける文化財建造物の防犯・防災に関する研究－内部専門組織を活用した安全計画のさらなる総合化」『日本建築学会計画系論文集』646号、査読有、pp.2731-2737、2009
- 大橋竜太「英国における「サーヴェイヤー」という職能について」『建築論攷』、査読有、中央公論美術出版、pp.393-403、2009
- 加藤耕一「海から見たモン＝サン＝ミッシェル」『海から見た都市と建築』日本建築学会、査読無、pp.27-35、2009
- 藤井恵介「日本人は中国建築システムをどう受け止めたか」『中国歴史建築案内』、査読無、TOTO出版、pp.374-385、2008
- 川本重雄「『源氏物語』と『源氏物語絵巻』の空間表現」『中古文学』82号、査読有、pp.2-23、2008

[学会発表] (計 50 件)

- ①平山育男「バルトンによる明治 25 (1892) 年 7、8 月の神戸、大阪における水道調査の日程について W・K・バルトンの研究 (17)、バルトンによる明治 25 (1892) 年の門司港、大牟田、福岡における衛生調査の日程について W・K・バルトンの研究 (18)、明治 25 (1892) 年 8 月 5 日 バルトン 正倉院に立つ W・K・バルトンの研究 (19)」日本建築学会関東支部研究会、2013 年 3 月 7 日、建築会館 (東京都港区)
- ②平山育男他 3 名①「橋本市古佐田大工太田家が所有する幣串に記される住宅に着いて 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家

の調査研究その 115」、日本建築学会北陸支部研究発表会、2012 年 7 月 21 日～22 日、信州大学工学部 (長野県長野市)

- ③大野敏 3 名①「掘立柱を有する曲り屋・小村勝広家主屋の変遷過程と建築的特徴 岩手県九戸郡洋野町の芝棟茅葺民家に関する研究 (2)、地束を有する荒巻信一郎家主屋の変遷過程と建築的特徴 岩手県九戸郡洋野町の芝棟茅葺民家に関する研究 (3)」日本建築学会関東支部研究会、2012 年 3 月 8 日、建築会館 (東京都港区)
- ④平山育男「近代の和歌山県橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材供給のあり方-11 大正 (3 1914) 年の木村家住宅における出面帳『日工扣』の性格 和歌山県橋本市中心市街地における町と町家の調査研究 その 101、近代の和歌山県橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材供給のあり方-12 大正 (3 1914) 年の木村家住宅『日工扣』における職人の日当及び祝儀 和歌山県橋本市中心市街地における町と町家の調査研究 その 102、近代の和歌山県橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材供給のあり方-13 大正 (3 1914) 年木村家住宅主屋建築における木材の購入 和歌山県橋本市中心市街地における町と町家の調査研究 その 103」日本建築学会関東支部研究会、2012 年 3 月 8 日、建築会館 (東京都港区)
- ⑤大橋竜太 4 名①「歴史的家屋の被災概要について 一東日本大震災による村田町 (宮城県) の歴史的建造物の被災に関する調査・研究 2」、2012 年度日本建築学会大会、2012 年 9 月 12 日～14 日、名古屋大学東山キャンパス (愛知県名古屋市)
- ⑥平山育男「近代の和歌山県橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材供給のあり方-1 大正 3 (1914) 年木村家主屋の事例 和歌山県橋本市中心市街における町と町家の調査研究 その 83、近代の和歌山県橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材供給のあり方-2 池永家の事例 1 『大正九年普請用材木控帳』の検討 和歌山県橋本市中心市街における町と町家の調査研究 その 84、近代の和歌山県橋本市中心市街地における住宅建築に対する木材供給のあり方-3 池永家の事例 2 大正 9 (1920) 年離れ座敷建築における木材の供給 和歌山県橋本市中心市街における町と町家の調査研究 その 85」日本建築学会関東支部研究会、2011 年 3 月 3 日、建築会館 (東京都港区)

- ⑦大野敏「知恩院御影堂内宮殿について(1)(2)(3)」日本建築学会関東支部研究会、2010年3月4日、建築会館(東京都港区)
- ⑧平山育男「明治30(1897)年代頃の天龍川流域における製材工場について、明治時代の天龍川流域における製材工場について」日本建築学会関東支部研究会、2010年3月4日、建築会館(東京都港区)
- ⑨平山育男「江戸時代末期のグラバーを取扱人とする機械製材について グラバーを取扱人とする機械製材の研究 1、江戸時代末期のグラバーを取扱人とする機械製材の実際 グラバーを取扱人とする機械製材の研究 2」日本建築学会関東支部研究会、2009年3月5日、建築会館(東京都港区)
- ⑩溝口正人「東海市龍雲院山門について」日本建築学会東海支部研究会、2008年2月14日～15日、じゅうろくプラザ(岐阜県岐阜市)
- ⑪大橋竜太・後藤治「アメリカの建築保存制度における実践的アプローチについて」2009年度日本建築学会大会、2009年8月26日～29日、東北学院大学(宮城県多賀城市)
- ⑫鳥海基樹・後藤治・村上正浩・大橋竜太・関沢愛「フランスに於ける文化財建造物の防犯・防災に関する研究」2009年度日本建築学会大会、2009年8月26日～29日、東北学院大学(宮城県多賀城市)
- ⑬大橋竜太・後藤治・村上正浩「建築保存における保険制度の役割について」2008年度日本建築学会大会、2008年9月18日～20日、広島大学東広島キャンパス(広島県東広島市)

[図書](計90件)

- ①藤井恵介編『「建築様式史研究」を越えて 西欧・日本・アジア』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム10、2013、63pp.
- ②川本重雄編『東アジアの宮殿建築と儀式 元日朝賀と宴会』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム9、2013、100pp.
- ③作事記録研究会(宮崎勝美、藤川昌樹、渋谷葉子)『萩藩江戸屋敷作事記録』、中央公論美術出版、2013、555pp.
- ④川本重雄編『神殿造と書院造の間 建築史学と考古学の接点を求めて』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム6、2013、97pp.
- ⑤加藤耕一『ゴシック様式成立史論』、中央公論美術出版、2012、342pp.

- ⑥上野勝久編『中世建築における様式建築の再考』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム8、2012、95pp.
- ⑦藤川昌樹編『江戸大名屋敷作事記録を読む』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム7、2012、114pp.
- ⑧上野勝久他『諏訪國一之宮 諏訪大社上社本宮建造物調査報告書』、東京藝術大学、2012、136pp.
- ⑨藤川昌樹編『歴史的町並みの近代化と建築史研究』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム5、2011、81pp.
- ⑩平山育男編『民家の移築と維持』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム4、2011、51pp.
- ⑪上野勝久他『鑿阿寺本堂調査報告書』、東京藝術大学・足利市教育委員会、2011、224pp.
- ⑫溝口正人編『日本寺院建築史と住宅建築史の接点と境界』、日本建築様式史の再構築連続シンポジウム2、2010、87pp.
- ⑬大橋竜太編『修復・再現と様式』日本建築様式史の再構築連続シンポジウム3、2010、97pp.
- ⑭溝口正人他『足助 伝統的建造物群保存対策調査報告書』、豊田市教育委員会、2010、430pp.
- ⑮光井渉編『日本住宅史と民家史を結ぶ』日本建築様式史の再構築連続シンポジウム1、2009、77pp.
- ⑯藤井恵介・角田真弓他『関野貞日記』中央公論美術出版、2009、803pp.
- ⑰玉井哲雄・川本重雄・藤井恵介他『日本建築は特異なのか—東アジアの宮殿・寺院・住宅—』、国立歴史民俗博物館、2009、112pp.
- ⑱藤井恵介・角田真弓他『高龍寺建造物調査報告』、高龍寺、2009、334pp.
- ⑲建築史楽会(後藤治・平山育男・藤川昌樹・光井渉)編著『日本建築100の知識』、彰国社、2009、221pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 恵介 (FUJII KEISUKE)
 東京大学・大学院工学系研究科・教授
 研究者番号：50156816

(2) 研究分担者

- ・川本 重雄 (KAWAMOTO SHIGEO)
 2008年度～2012年度
 京都女子大学・家政学部・学長
 研究者番号：40175295
- ・平山 育男 (HIRAYAMA IKUO)

- 2008年度～2012年度
長岡造形大学・造形学部・教授
研究者番号：50208857
- ・溝口 正人 (MIZOGUCHI MASATO)
2008年度～2012年度
名古屋市立大学・大学院芸術工学研究科・教授
研究者番号：20262876
 - ・後藤 治 (GOTO OSAMU)
2008年度～2012年度
工学院大学・建築学部・教授
研究者番号：50317343
 - ・上野 勝久 (UENO KATSUHISA)
2008年度～2012年度
東京藝術大学・大学院美術研究科・教授
研究者番号：20176613
 - ・大野 敏 (ONO SATOSHI)
2008年度～2012年度
横浜国立大学・大学院都市イノベーション
研究院・准教授
研究者番号：20311665
 - ・藤川 昌樹 (FUJIKAWA MASAKI)
2008年度～2012年度
筑波大学・システム情報系・教授
研究者番号：90228974
 - ・光井 渉 (MITSUI WATARU)
2008年度～2012年度
東京藝術大学・美術学部・准教授
研究者番号：40291819
 - ・大橋 竜太 (OHASHI RYUTA)
2008年度～2012年度
東京家政学院大学・現代生活学部・教授
研究者番号：40272364
 - ・加藤 耕一 (KATO KOICHI)
2011年度～2012年度
東京大学・大学院工学系研究科・准教授
研究者番号：30349831
 - ・角田 真弓 (TSUNODA MAYUMI)
2008年度～2012年度
東京大学・大学院工学系研究科・技術専門
職員
研究者番号：20396758